

『だってたのしくたべたいんだもん』 キャリル・ハート×呉藤加代子 対談

CARYL HART



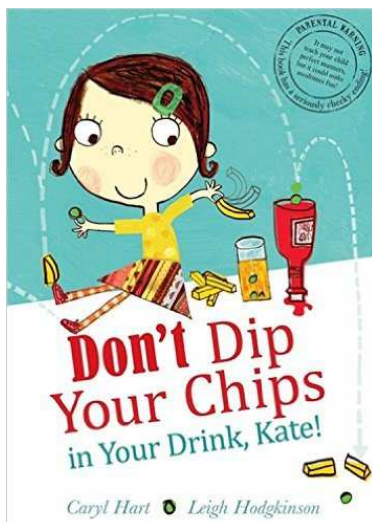
GOTO KAYOKO

Q1 (呉藤加代子) :

絵本を目にしたとき、表紙のコピーに導かれるように一読して思わず大笑いしてしまいました。cheeky (ちゃっかり) なエンディングがおもしろおかしくて、主人公のケイトちゃんは英国の子供らしいなあと思って。ホントに楽しい絵本ですね。

A1 (キャリル・ハート) :

絵本を気にいって、おもしろく思ってください、とても嬉しいわ！主人公のケイトは娘が7、8才の頃のお話のもとになっているの。本当にチップス (揚げたてフライドポテト) を飲み物にちょこんとつけていたのよ！「どうしてそうするの？」と聞いたら「アツアツだから、冷ましているの」ですって。娘にとってはごく自然なことだったみたい。それで考えさせられたわ。大人のルールって子どもにしてみれば、すごくヘンなのね、って。



Q2 (呉藤加代子) :

表紙のキャッチコピー“cheeky ending”が効いています。はじめてこの絵本の表紙を見たとき、このフレーズに惹かれてしまいました。ホントにみなさまも目を留め、本を手にとって読みだすくらい！

A2 (キャリル・ハート) :

出版社さんが『ご注意！』と付けたすことにしたの。『まさか[・・・]の結末』があまりにも悪びれない感じなので、お父さんお母さんによっては不愉快に思われてしまうのを心配したみたい。子どもにおぎょうぎ悪いことを見せてる本！って。わたしが思うに、子どもはいいこととダメなこと、ちゃんと分かっていて、ケイトや女王さまのようなマネはしようとしないの。本に出てくるめっちゃくちゃな子たちのおもしろがるのは「わたし(ボク)」はちゃんとおぎょうぎよくできるもんね、って思ってるからなのよね。

Q3 (呉藤加代子) :

この本は2016年英国フェア(数か所の都市百貨店にて開催)で展示販売されました。ある会場で最後まで読み終えたスタイリッシュなカップルが、最後にケラケラ笑い合っていました。大人も楽しめる絵本だと思います。イギリスの大人の方々はこの本を読んで、どんな反応をしていますか？

A3 (キャリル・ハート) :

そう言っただいてとてもうれしいわ！大人にも子どもにも語りかける本を書きたかったの。ママとしては、子供たちが食べているときに、ついガミガミ言っちゃうのよね。まっすぐすわって！のみこまない！フォーク使って！うんざりするくらいで、しょっちゅうお食事はだいなし、なんだかいさかいの場にもなっていたわ。本を書くことで思いだしたけど、食事の時間は子どもと気持ちをつなぐとき、子どもたちとその日(子どもたちの)あったことを話して、じっくり耳をかたむけるときのはずなの。だから、この本でお父さま方お母さま方に思い出してほしくて。おぎょうぎばかりに目を向けがちなのをやめて、かわりに子どもと一緒に時間を楽しむってことを。

Q4 (呉藤加代子) :

この絵本を初めて読んだとき、お子さまがたはどんな感想でしたか？

A4 (キャリル・ハート) :

イギリスで2009年に出版されたとき、子どもたちはまだまだ幼かったわ。ママすごい！と大喜びして、本を書いちゃうママ、かっこいいと思ってくれたわ。今でも二人の自慢のママではあるけど、一緒に本屋さんに入って、わたしの本を探るようなことはさせてくれないの。書いた本を目立つ場所に並べたり、お客さんに見せたりしたら恥ずかしくなる、って！二人は今14才と18才なので、ティーンエイジャーはそんな感じかしらね！

Q5 (呉藤加代子) :

ご自身はケイトちゃんのような子供でしたか？

A5 (キャリル・ハート) :

はい！しょっちゅう疑問を投げかけてばかりいるような子どもだったわ。小生意気で誰かズルいこととか、納得いかないことをしてたら、口に出していたの。大変なことになったときもあったわ。

一度先生に言ったの。「授業中みんなの態度がわるいのは、先生の授業がつまらないからだって。」私なりの考えで、どうしたらもっと面白い授業ができるか、説明してあげたの。親切のつもりで、なんで先生が怒るのかわからなかったわ。

今でも、私の意見をちゃんと聞くべきだったでしょ、と思うの！

Q6 (呉藤加代子) :

この物語は娘のジェシーちゃんとの会話から生まれたとのことですが、女王さまを女の子として描いたことにセンスを感じます。

A6 (キャリル・ハート) :

リーのアイデアで女王さまを子どもとして描いてくれたの。見事なお手並みのおかげで、本当に素晴らしい絵本になったわ。とにかく、女王さま方も見習わなくてはね！

Q7 (呉藤加代子) :

私は世の中の「楽しいこと」「素晴らしい事・人」を多くの人に伝えたくてライターをしてきました。児童作家としてどんな思いで仕事をしていますか？

A7 (キャリル・ハート) :

ジェスがあかちゃんのころ、読みきかせをたっぷりしていたわ。素敵なお本もたくさんあったけど、わたしからしたらちょっとね・・・、というものもあったの。ある日、ぱっとしない本をいくつか読んでから夫に言ったの。「もっといいおはなし、わたし書けるわ！」「じゃあ書こうよ」と、夫が言ってくれたので、一歩踏み出すことにしたの！

新米のお父さん、お母さんで子どもたちのためにおはなしを書きたくなる人は多いわ。でも、本を出すことって、想像するよりもはるかに大変なことね。あきらめてしまう人が多いけれど、わたしはもう心に決めていて、夢をかなえたかったの。そのころ週3日働き、ジェスがまだ川さかったので、本当に時間も体力もなくて、そこそこにしか進まなかったわ。でも、心に決めてから7年後、病気のため仕事を辞めないといけなくなったの。

夫と相談して、一年間働きに出ないで、本の出版にこぎつけることに専念することにしたの。一年で進展しなかったら、また働きに出る条件で。それはイヤだったので、なにがなんでも作家になるの、と決めていたわ。幸運にもうまくいって、2冊の出版を取りつけたの。” Don't Dip Your Chips in Your Drink, Kate” —『だって たのしく たべたいんだもん！』はその中の1冊。もう1冊、” Rhino? What Rhino?” という本も同じ年に出版されたわ。今は27タイトル出て、15タイトルほどが製作中。夫がわたしを信じ、力になってくれているおかげで、ここまでこれたの。本当に恵まれているわ。

Q8 (呉藤加代子) :

原作に遊び心を感じたので、ケイトちゃんの手紙文に「おぎょうぎ」と「おじょうひん」を間違えるという仕掛けを取り入れました。そしてもうひとつ。女王さまがケイトちゃんとテーブルに着いて会話するシーンの中で「tart」と「start」を掛けていると思ったので、「パイ」「いーっパイ」と日本語にも活かしています。意識してのことですか？

A8 (キャリル・ハート) :

わたしの本は英語のライムが（韻をふむこと）いっぱいね。日本語訳で言葉に韻を持たせることがどれほど難しいのか、想像できないわ。翻訳家のお仕事は、作家業より10倍も大変でしょう！しっくりくるリズムで、本を元気よく大きな声で読めるようにしたかったの。子どもたちに読むとき、お食事ルールのリストのところと一緒に手拍子を打つときもあるわね。子どもにとってライミング調のおはなしはとても覚えやすいみたいで、すっと入りこめるのではないかしら。文字が読めなくてもね。



Q9 (呉藤加代子) :

わたしはエンディングの訳に苦労しましたが、一番苦労した点は？

A9 (キャリル・ハート) :

このおはなしは1年ほどじっくり考えてから、机に向かって書き始めたの。なので、幸いどの部分もかなりすんなり書けて、本当に苦労することはなかったの。でも他の本で、もういっぱい、いっぱい冒のおれる部分があったわ。ライミングで書くことって、難しいもので、特に言いたいことが頭の中にあるのに、ライムできる言葉が見つからないか、リズムがぴったり当てはまらないときは、もう大変。何年か経って、難しい部分はどうすればいいかわかってきて、今はちょうどいいぐあいに削りあげて楽しむているの。

Q10 (呉藤加代子) :

一番気に入っている箇所は？

A10 (キャリル・ハート) :

ケイトが女王さまにお手紙を書いているところね。小さいころそうしたこと、はっきり思いだせるわ。お手紙をポストに入れてから、気づいたの。あっ！手紙の頭に自分の住所を書いてなかった。女王さまがお返事のお手紙を書きたくても、できないじゃない。とても情けなくなったこと、覚えてるわ！新しいお手紙を書けばよかったのかもしれないけれど、そのときはいっぱいいっぱい、と思っていたの。

Q11 (呉藤加代子) :

イギリスでたくさん本を出版していますが、今後手掛けたいテーマはありますか？

A11 (キャリル・ハート) :

今、製作中の本はたくさんあるわ。シリーズもので、アルビーという小さな男の子が主人公のおはなしがサイモン&シュスター社から出ているの。ちょうど7冊目を書き終えて、つぎ8冊目のおはなしを考えているところ。おもしろおかしくて、学校で使うのも素晴らしいわ。子どもたちが楽しく読んで書くようになること、うけあいよ。

『はじめの一步』シリーズもウォーカー・ブックス社から今年出る予定。かわいらしい本よ。ローレン・トビアさんのイラストで、本当にいろんな文化の人たちが描かれているの。自分の本にいろんな民族、家族、社会層の人たちを必ず登場させたい、という思いが強いので、このシリーズの絵に大満足よ。

ノージー・クロー社から絵本小説シリーズも出しているの。3冊目まで出て、なかなか売れ行きがいいので、続きも出したいわ。” The Invincibles” 『ザ・インヴィンシブルズ』 (直訳：負けしらず) というシリーズよ。わたしの子ども時代がおはなしのもとになっているので、すごく思い入れがあるの。

そろそろ、ホッター・チルドレンズ・ブック社から新しいシリーズもあるの！第一作目

” Knock Knock Dinosaur” 『ノック・ノック・ダイナソー』 (直訳：トントンきょうりゅうだ) という本が先週出たばかりよ。ハチャメチャな数かぞえの本にはきょうりゅうがいっぱい、トタバタがすごい！つぎの“Knock Knock Pirate” 『ノック・ノック・パイレーツ』 (直訳：トントンかいぞくだ) という本が秋に出る予定。パッと目に飛びこむようなイラストはニック・イーストさんが描いたもので、ホントにあちこちおもしろおかしく

びっくり仰天するところ満載よ！

こんな感じで、数年先までわくわく、楽しみにしているの。

Q12 (呉藤加代子) :

文にぴったりの可愛らしい絵ですが、初めて絵を見たときの感想は？

A12 (キャリル・ハート) :

リーの絵は本当に素敵！個性が光って羨望ゆたかね。切り貼りのコラージュ、大好きよ。子どもたちもこういうふうにやれば、ぼく、わたしにも絵つくれそう！と思うもの。リーはとても簡単そうにやるので、すごい！だって、イラストの制作は見かけほど簡単ではないこと、知ってるわ。

Q13 (呉藤加代子) :

お二人がコラボレートすることになったきっかけやエピソードを教えてください。

A13 (キャリル・ハート) :

イギリスでは作者とイラストレーターが直接一緒に作業すること、そうないわね。まず文章をわたしを書いて、出版社に送るの。そのあとは編集者さんと作業するわ。編集者さんは、デザイナーの方と文のレイアウトや本のたまかな感じを決めるの。それからデザイナーの方とイラストレーターが絵を制作していく、といったぐあいね。

出版社がおおまかなレイアウトとイラストレーターの下絵をわたしに送って、気にいったかどうか確認してくれるの。そして足りない部分があればなんでも伝えることができたわ。たとえば、見開きページで馬が到着してドアベルを鳴らす場面では、ドアベルが描かれてなかったわ。こんな感じで細かい部分までくまなくチェックできるの。

大事なことお伝えするわ。イラストレーターが手がけた本は自分のものなので、文を読んで自由自在に絵を描きだせるのね。おはなしにいろんな絵を添えて、イラストレーター自身のおはなしを盛りこむこともよくあるわ。たとえば、ケイトちゃんのお部屋の壁の絵（ケイトちゃんが描いた？）やオリジナルの動物がおはなしのそこそこに出てくるところがそうね。

Q14 (呉藤加代子) :

私は日本の地方都市で暮らしています。キャリルさんもカントリーサイドに住んでいる、とお聞きしていますが、今いる場所の魅力をお願いします。

A14 (キャリル・ハート) :

住んでいる村は家が100軒ほどの集落で、3キロメートルほど離れたところに小さな町があるの。村にはお店はないわ。パブが1軒あって、お茶やお酒を飲んだり、食事をとったりできるわよ。お散歩が大好きで犬と一緒に出かけるの。本当にきれいな田舎で暮らしていて、すごく恵まれているわね。だって、毎日歩きまわれるのよ！

ここの暮らしで不便な点は、お店へは車でないと行けなくて、子どもたちも学校に歩いていかれないのよね。冬は村から出られないときもあるわ。急な坂の上にある村で、道はとても滑りやすくなるので。そんなこと誰も気にしなくて、そり滑りに出るまでよ！



Q15 (呉藤加代子) :

私はパソコンで仕事をする時はいつもコーヒーを飲んでます。英国人は1日に6回紅茶を飲むと言われていますが、仕事中也やはり紅茶ですか？

A15 (キャリル・ハート) :

アハハ！！その通り！コーヒーはジェスがおなかでいたときにやめて、今はだいたい紅茶にしているわ。家の中がさむくなるときもあるので、紅茶をたっぷり飲み、体を温めているの。作家仲間でもコーヒーを飲む友達が多いけどね。

よくカフェに行って仕事しているわ。だって、家の中だと本当に冷えるし、ちょっと寂しくなるもの。紅茶ポット一つで何時間ももたせることができるわ。

Q16 (呉藤加代子) :

最後に日本の読者にひと言お願いします。

A16 (キャリル・ハート) :

わたしたちの本が日本語訳で出ているなんて、もう大感激。日本をそのうち訪ねてみなさまにお会いしたいわ。日本のいいところたくさん聞いているので。下の娘はアニメファンで日本の文化が大好きなの。イギリスと異なって、とても新鮮ね。家で自己流のお寿司を作るけど、いつか日本で寿司を食べてみたいものね！

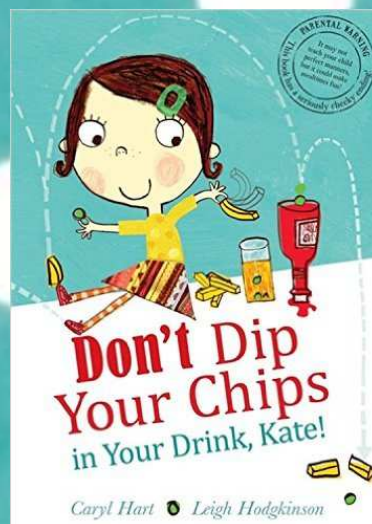
学校向けの活動をいろいろとしているので、きっといつか日本に行って、学校訪問もできるかもしれないわ！

Q17 (呉藤加代子) :

また訳せる日を楽しみにしています。

A17 (キャリル・ハート) :

ぜひとも！うれしいかぎりです！



『Don't Dip Your Chips』 Caryl Hart × Goto Kayoko conversation

CARYL HART



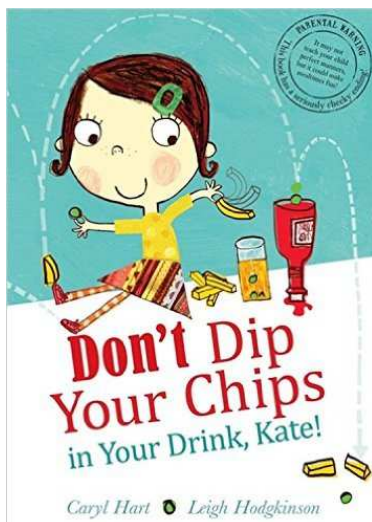
GOTO KAYOKO

K1 (Goto Kayoko):

When the first time I read the book through, I found myself having a hearty laughter unconsciously. The story is hilarious! The Cheeky ending is so pleasant and Kate is really like a British Child! Could you tell me some comments on my remarks?

C1 (Caryl Hart):

I'm so glad you liked the book and found it funny! The character is based on my daughter who was around seven or eight years old at the time. She actually did dip her chip in her drink! When I asked her why, she said it was too hot and she was cooling it down. In her mind, it was a very sensible thing to do, and it made me think how silly some of our adult rules must seem to a child.



K2 (Goto Kayoko):

The phrase, "cheeky ending", printed on the cover of the book is catchy! At the first time the cover of this book caught my sight, it attracted me so much! It really attracts people to pick the book and read! How do you think about it?

C2 (Caryl Hart):

The publishers decided to add the "warning" that the book has a cheeky ending because they were worried that some parents might think the book was teaching their children bad manners! I think children have a very good idea about what is right and wrong and would not try to copy Kate's and the Queen's behaviour. I think children like to see characters being naughty because it reassures them that THEY are know how to be good!

K3 (Goto Kayoko):

This book was displayed and sold at the British Fair 2016 in several department stores (in different cities). One day after a stylish couple had finished reading this book, they giggled each other at the end. This hilarious story is also enjoyable for Adults. How do you think about it? What kind of reactions have the Adults in your country expressed?

C3 (Caryl Hart):

I'm so pleased you have said that! I wanted to write a book that spoke to adults as well as to children. As a mum, I used to spend a lot of time telling my children off when we were eating meals. Sit up straight! Don't slurp! Use your fork! I was doing it so much that it would often ruin the meal and turn it into a bit of a battle ground. Writing the book helped me remember that mealtimes should be a time to connect with your children, to spend time talking with them about their day, to listen to them. So, I wanted the book to remind parents not to focus too much on manners and enjoy their time together instead.

K4 (Goto Kayoko):

What have your children told you after reading over this book?

C4 (Caryl Hart):

The book was published in 2009 in the UK, when my children were still quite young. They were very proud of me and thought it was cool that their mum had written a book. They are still proud of me, but don't let me go into book shops to find my books if they are with me. They get embarrassed if I put my books to the front of the display or show them to customers! They are 14 and 18 now, so I guess that's teenagers for you!

K5 (Goto Kayoko):

Were you a girl like Kate, when you were a child?

C5 (Caryl Hart):

YES! I was the sort of child who constantly asked questions. I was cheeky and would speak out if I felt somebody was being unfair or was doing something that didn't make sense to me. Sometimes it got me into trouble.

Once I told a teacher that children misbehaved in his class a lot because his lessons were boring. I explained what I thought he could do to make the lessons more interesting. I thought I was being helpful and couldn't understand why he was angry.

I still think he should have listened to me!

K6 (Goto Kayoko):

I know this story was born from a conversation with your daughter, Jess. Especially I love the wonderful idea that the Queen was drawn as a girl. How have you created the idea?

C6 (Caryl Hart):

It was Leigh's idea to draw the Queen as a child. I think it was a brilliant move and really made the book. After all, Queens have to learn too!

K7 (Goto Kayoko):

Could you tell me what have motivated you to be a children's author?

A writer as myself, I would like to spread and share lots of 'delightful things', 'wonderful things', and 'wonderful people' in the world.

C7 (Caryl Hart):

When Jess was a baby, we spent a lot of time reading books together. Many were wonderful, but some were not very good, in my opinion. So one day, after reading a few poor quality books, I said to my husband, "I could do better than that!" He said, "Go on then," so I decided I would have a go! Many new parents are inspired to write stories for their children, but it's a lot harder to get a book published than many people realise. Many give up but I was determined to make it work, if I could. At the time, I was working three days a week and Jess was still young so I didn't really have enough time or energy to get very far. But seven years later, I had to leave my job due to ill health.

My husband and I decided that I could take a year out of paid work to try and get some books published. If I hadn't made any progress in a year, I would have to go back to work. I didn't want to go back to work so I was very determined to become an author. Luckily for me, things worked out and I got two book deals. Don't Dip Your Chips in Your Drink, Kate was one of them. The other was for a book called Rhino? What Rhino? which was published the same year.

I now have 27 titles published and another 15 or so in production. I'm very lucky to have a husband who believed in me and helped me get where I am today.

K8 (Goto Kayoko):

This book is filled with witty word plays and I love them!

Have you intendedly arranged the words for the readers to have fun?

I guess you have put the word 'tart' twice (tart and start) in repetition of the same pronunciation in the queen's talk at the table with Kate. As the same way, I tried to apply rhymes in Japanese. For example, I translated the word 'tart' as 'pie' to set rhymes in Japanese. I have also set another word play. In Kate's letter to the Queen, she has crossed out the word 'posh' [o-iyoh-hin in Japanese] and put the word 'manner'[o-gyoh-gi] instead. The sounds and meanings of those two words have similarity in Japanese.

C8 (Caryl Hart):

The whole books rhymes in English. I can't imagine how difficult it must have been to translate into Japanese and still make it rhyme! I think your job is ten times more difficult than mine!

I wanted the book to sound good when read out loud. Sometimes when I read it to children, we clap along to the list of table manners. I think children remember rhyming stories much better and are quickly able to join in, even if they can't read the words themselves.

K9 (Goto Kayoko):

It was quite hard to express the “cheeky ending” in Japanese. I have spent lots of time to translate for the last two pages. Which pages have you had a tough time with?

C9 (Caryl Hart):

I was thinking about this story for about a year before I actually sat down to write it. Luckily for me, it all came quite easily and I didn't really struggle with any of it. But I have struggled with many many parts of other books. Writing in rhyme can be difficult, especially if you know what you want to say, but can't find a way to say it that rhymes and fits the correct rhythm. Over the years, I've learned how to deal with difficult sections, and I enjoy the challenge of creating something that works just right.

K10 (Goto Kayoko):

Which pages or parts are your most favorite ones in this book?

C10 (Caryl Hart):

I love the letter that Kate writes to the Queen - I can remember doing this when I was young. I remember posting the letter and then realising that I had not put my address on the top of the page, so that the Queen wouldn't have been able to reply, even if she had wanted to. I remember feeling very silly! I suppose I could have written a new letter, but it felt like too much work at the time!

I also love the rhyming table manners and was very pleased with myself when I had the idea to give the Queen the same list.

I wanted to print it as a poster to stick on the wall when my children were little, to remind them how to behave properly at the table.

K11 (Goto Kayoko):

I know you have published a lot of books and series. Could you tell us about your new theme and some plans of your work in your near future?

C11 (Caryl Hart):

I have lots of books in production at the moment. I have a series that stars a little boy called Albie, published by Simon and Schuster. I've just finished writing book 7 and am planning book 8. These are great fun and are brilliant to use in schools to encourage children to enjoy reading and writing.

I have some first experiences books coming out this year with Walker Books, which are looking lovely. They are illustrated by Lauren Tobia and are very multicultural. I am passionate about ensuring my books include people from all racial, family and socioeconomic and am delighted with the look of these books.

I am also working with Nosy Crow on some illustrated fiction. There are three books in this series so far and I'm hoping that we will do some more as they seem to be selling well. The series is called The Invincibles and is based on my own childhood so they are very close to my heart!

- Oh, and I have a new series with Hodder Children's Books! The first is called Knock Knock Dinosaur, published last week. It's a crazy counting book with lots of dinosaurs and lots of chaos! The next book is called Knock Knock Pirate, which comes out in the autumn. They are brilliantly illustrated by Nick East and are full of really funny details and surprises!

So, there's a lot to look forward to in the coming couple of years.

K12 (Goto Kayoko):

All the pictures are very lovely and nicely matches with your story. What was the first impression have you got from the pictures?

C12 (Caryl Hart):

I love Leigh's work! I think she is very original and inventive. I love the collage style because I think children feel they could make pictures that way, too! Leigh makes it look very easy although I know that creating illustrations in this way is not as easy as it looks!

K13: (Goto Kayoko):

Could you tell us some stories on collaborating with Leigh for this book? We are curious about how has this collaboration started and carried out.

C13 (Caryl Hart):

In the UK, writers don't often work directly with illustrators. I wrote the text and sent it to the publisher. I then worked on the text with an editor. The editor works with a designer to lay the text out and decide roughly how the book will look. Then the designer works with the illustrator to create the pictures.

The publisher sends me rough layouts and illustrator's sketches to make sure I'm happy, and I can then point out anything that might be missing. For example, in the spread where the horse arrives and rings on the doorbell, Leigh had forgotten to draw a doorbell. I can pick up on details like this if I spot anything missing.

It is important for illustrators to have ownership of the books they work on, so they are usually given a lot of freedom to interpret the text in their own way. Illustrators add a huge amount to a story and often include details that tell a story of their own. For example, they might add pictures to the character's walls, or create an animal character who appears throughout the story.

K14 (Goto Kayoko):

I've lived in a local city of Japan since I was born. And I have heard you have lived in the countryside of the UK. Could you tell me the charm of your hometown?

C14 (Caryl Hart):

I live in a village of around 100 houses about 3 km from a small town. We have no shops in the village. There is one pub, where you can have a cup of tea or an alcoholic drink or a meal. I love walking, and have a dog. The countryside is very beautiful where I live so I'm very lucky to be able to walk in it every day!

The disadvantage of living where we do, is that we have to drive to the shops and the children are not able to walk to school. In winter, we are sometimes unable to leave the village because it is at the top of a steep hill and the roads can be very slippery. Nobody minds though, we just go sledging!



K15 (Goto Kayoko):

I drink coffee whenever I work on PC. And I know the British drinks tea six times a day. Are you also drinking tea while you are working?

C15 (Caryl Hart):

Ha ha!! YES! I gave up drinking coffee when I was pregnant with Jess and now mainly drink tea. It can get very cold in my house, so cups of tea keep me warm! Lots of my writer friends do drink coffee though.

I often go to a cafe to work, because it can get very cold in my house and a bit lonely. I can make a pot of tea last a very long time!!

K16 (Goto Kayoko):

Could you give some messages to the Japanese readers?

C16 (Caryl Hart):

I am so thrilled that our book is published in Japan. I would love to come to your country sometime and meet you as I have heard a lot of good things about Japan. My youngest daughter is an animee fan and loves the Japanese culture, which feels very different to our own. We make our own sushi at home and would love to try some proper Japanese sushi sometime!

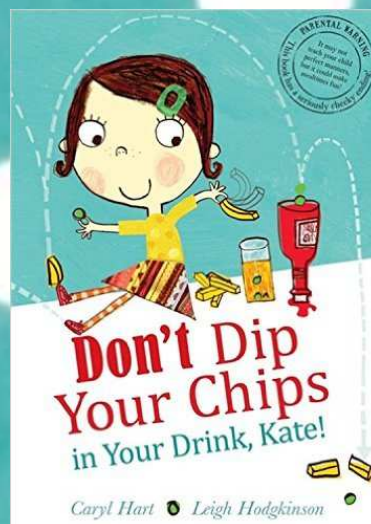
I work a lot in schools, so perhaps one day I could come and visit some schools in Japan!

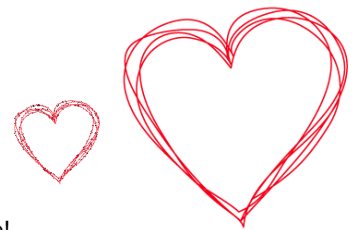
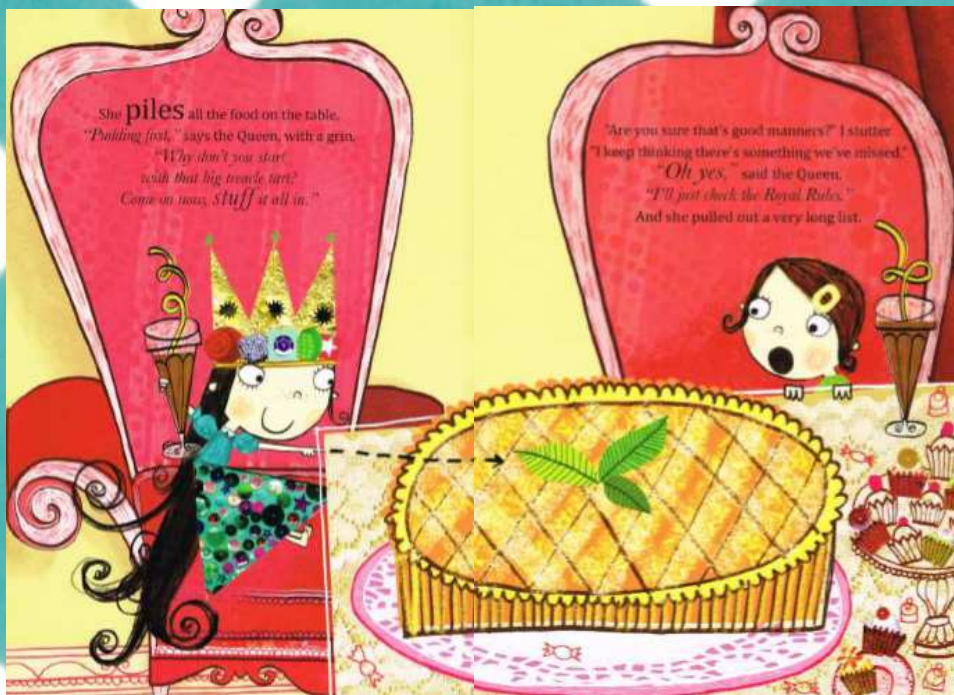
K17 (Goto Kayoko):

I am looking forward to translating another book of yours one day!

C17 (Caryl Hart):

I would love that!!





原書: Don't Dip Your Chips in Your Drink, Kate!

タイトル: だっただのしく たべたいんだもん!

定価: 1500円+税

著者: キャリル・ハート (Caryl Hart) (作) リー・ホジキンソン (Leigh Hodgkinson) (絵)

訳者: 呉藤加代子 (ごとうかよこ)

出版社: バベルプレス 判型: 32.0 × 23.0 × 1.0cm (上製) ISBN: 978-4-8944

9-161-8

頁: 32ページ

ご購入:

<http://www.babelpress.co.jp/shopdetail/00000000872/002/X/page1/order/>

以上、ご高評くださいますよう、お願い申し上げます。

【本件に関する問い合わせはこちら】

〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町2-13-18

TEL: 0422-24-8935 FAX: 0422-24-8932 email: press@babel.co.jp

バベルプレス (株式会社バベル) HP: <http://www.babelpress.co.jp/>